

平成24年度第1回北区まちづくり協議会全体会
基調講演 鴻巣講師

重複した言葉遣いや、明らかな言い直しのあったもの、わかりづらい表現などは、整理した上で作成しています。

鴻巣講師

ご紹介にあずかりました、南三陸町ガイドサークル代表の鴻巣修治でございます。本日はよろしくお願い申し上げます。

私の方からは、震災前のまちの姿、それから、震災発生時の人々の様子、被害の状況、避難生活、あるいは、復旧に向けたいろいろな状況や困難、それから、復興後の現在の南三陸町、こういったことを中心にお話をさせていただきます。

震災前の南三陸町でございますが、まちは宮城県の北部に位置しております。今、周りはほとんど、三つの市に編入になりまして、宮城県の海岸線の北部ではたった一つの町というふうになっております。

まちは、皆様もご存じのとおり、リアス式海岸が織りなす風光明媚な景色で知られております。また、沖を流れる栄養豊富な暖流といった豊穡な海を持っておりまして、特に、カキ、サケ、ホタテ、ワカメなど、四季折々の食材に恵まれたまちでもございます。

そのために、私どもの活動もそうですが、まちの産業の大体50%近くが観光中心でございます。震災前は、年間100万人、民宿も年間23万人のお客様をお迎えしていた観光のまちでございます。

災害発生時の模様でございますが、3月11日14時46分、マグニチュード9.0、震度6弱の巨大地震が発生しまして、その50分後の15時35分前後、巨大津波に襲われました。5波来たうちの2波目でまちは壊滅いたしました。津波の高さは、その場所によっても異なりますが、15メートルから16メートル、最も高いところでは二十数メートルという津波でございます。

まちの中核である役場、警察署、消防署、病院は、すべて機能を失いました。まちの職員も四十数名が犠牲になりました。一時、南三陸町の応答がない、1万人の方が連絡がとれないというような状況になりました。

津波のまちとして、日ごろの避難訓練にもかかわらず、死者565名、行方不明者305名、計870名の甚大な被害をもたらしたわけでございます。

その後、今日まで、国あるいは県が認めるか認めないかは別といたしまして、死者、行方不明者、それに震災関連病を含めると、犠牲者は恐らく1,000人を超しているだろうと思われまます。

人的被害もそうでございますが、建物の被害もまち全体の62%は流出してしまい



ました。避難者数も一時は8,000人以上になりまして、自宅避難を含めると約1万人近くになるかと思われまます。

私の住んでいるところは、まちの中心部から離れた旧歌津町というところですが、避難者のほとんどはまちの小学校、中学校、あるいは高校の体育館に避難をしておりました。特に、私の地区の小学校は、地上から大体十数メートルの高台にございまして、その小学校の裏にひな壇のように中学校がございまして、その小学校の下に旧歌津町のまち並みがございまして、その小学校の校庭まで津波が襲ったわけにございまして。

その後、小学校の体育館は、避難所として使えなくなりまして、遺体安置所になったわけにございまして。そして、まちの中心部には総合体育館がございまして、その中ホールに設けられた遺体安置所、ここで確認作業がされまして、連日、たくさんの方が確認に来ておりました。

避難生活もそうにございまして、先ほど申し上げましたように、それぞれ小・中・高の体育館に皆さんが避難されたわけですけれども、不安と寒さ、それから、肉親の安否、こういったことが交差する中で、一時的に落ちつくことができたというような状態にございまして。

また、一方で、これらの学校及び総合体育館の玄関やロビーは、身元不明者の遺体確認時刻、または、この避難所に避難している方の名簿が表示されておりました、それを確認する町民の皆さんであふれ返りまして、かなりの混乱を来しておりました。

その後、避難所収容の不足が生じまして、一部の避難者の皆さんは、やむなく近隣市町村への移動を余儀なくされました。まちの各所で、バスの中から手を振りながら地元の方と一時お別れをする光景が見られました。

私は高台の住宅団地で、ここは、五十数世帯、住民の数が130名ほどにございまして。そこで、皆様から背中を押されまして、臨時の災害対策本部長ということで救援活動を行って来ました。今考えますと、本当に今まで経験したことのない、忘れられない思い出となりました。

本日、私たちのまちから来ている3名の方も、その中心的な役割をされた方々にございまして。

時間の経過とともに、必死で献身的に活躍された自衛隊の皆様、並びに、米海兵隊の皆様、それぞれによって、国道の開通、河川、海辺の復旧、医療支援、そして、やはり忘れられないのは、全国のボランティアの皆様によって、町全体の機能も徐々に回復してまいりました。

現在の南三陸町では、海外及び全国から、たくさんの義援金、給付金が寄せられまして、金額、件数とも、おかげさまで被災地では断トツとなりました。個人あるいは諸団体の皆さまといたにネットワーク化して今後の復興の一番の柱にしていくか、町長も強くおっしゃっておりました。

また、その一方で、震災以来さまざまな問題を抱えておりますのも事実でございまして。

たくさんある中で代表的な事例は、被災民ばかりではなくて、まち全体で、生活不活発病という心の問題が蔓延しております。特に顕著に見られるのが、仮設住宅にお住まいの方々でございまして。

すべてではございませんけれども、ひとり暮らしの人など、いろいろ体を動かしたり、しばらくぶりでスポーツをしたり、あるいは、グラウンドゴルフをしたいと思っても、その会場は津波で流されておりまして。それから、仮設住宅には、急いで入った関係上、隣近所を見ても知らない方で、お茶を飲みに行きたいなと思っても何か気持ちが引ける、あるいは、一緒に買い物にも出かけたいたいのだが、声をかける気にもなれない。つまりは、家に引きこもってしまうという現象でございます。

それから、私どもの町ばかりではございませんが、被災した海岸線に多い高血圧症です。漁師の方は、船を流され、やる仕事がないので、たばこ、お酒と、そういったことで一時は高血圧症が蔓延いたしました。

生活不活発病、これは見過ごせないということで、本当に町を挙げて、健全な姿に戻そうという運動が広がっており、全国からのご支援の皆様、推進員の方が、特に仮設住宅に家庭訪問をされまして、そのケアに当たっているというのが現状でございます。

その後、全国で減災という言葉が叫ばれるようになりました。減らす災害、この減災とは、一口に言いますと、人の犠牲をいかに減らすかという意味でございます。

それを達成するために、今回の協議会全体会の開催意義にありますように、地域単位でのきめ細かい防災対策は、私どもの経験上、間違いなく必要でございます。

私ども被災地の者は、多くのものを失いました。しかし、全国の皆様のご真心で色々なことを得ることもできました。最も強調したいことは、数多くのことを学ぶことができたことです。津波憎しの思いの一方で、津波はすべて悪ではなく、人間世界にとって恵みの基礎になるということも学ばせていただきました。

そして、驚くべき海の再生も出現しております。この辺の詳細なことは、明日の防災リーダー研修で、後藤講師に話していただきますけれども、いずれにせよ、自然は人知の及ばないことがわかりました。人知の及ばない、自然の津波というものに対決すべきではありません。

私ども語り部は、この活動を通じまして、昨年5月から、1万人近くの方々にいろいろな場面でお話を聞いていただきました。私どもは、それを通して、一つの共通する事柄を知りました。自然は操作できるという人間のおごり、私たちは、これを冷静に知ることだと思えます。私たちは、おごりに対して、自然界から挑戦を受けたのだと思えます。この、邪魔なものは人間の世界に入ってきてはならないという発想を変えない限り、惨状は繰り返されるでしょう。

最後に、今、三陸の海は、穏やかで静かに光っております。本日、また、忘れられない日がめぐってまいりました。あれほど荒れ狂った海が、本当に信じられません。私は、今朝、廃墟と化した瓦れきのまちを車で通ってまいりました。何だか夢を見ているような、不思議な感じがしております。

今、三陸の漁民の皆さんは、海の生産物の品質、価格、ともに最高の出来高に、やっと笑顔が戻ってまいりました。

最後に、この震災を受けまして町民会議で採択された、未来への宣言を皆様にお示しして、終わりにしたいと思います。

「津波を忘れない。真心を忘れない」。

以上でございます。ありがとうございました。